

## フランクリンの十三徳

- 節制** 飽くほど食うなかれ。酔うまで飲むなかれ。
- 沈黙** 自他に益なきことを語るなかれ。駄弁を弄するなかれ。
- 規律** 物はすべて所を定めて置くべし。仕事はすべて時を定めてなすべし。
- 決断** なすべきをなさんと決心すべし。決心したることは必ず実行すべし。
- 節約** 自他に益なきことに金銭を費やすなかれ。すなわち、浪費するなかれ。
- 勤勉** 時間を空費するなかれ。つねに何か益あることに従うべし。  
無用の行いはすべて断つべし。
- 誠実** 詐りを用いて人を害するなかれ。心事は無邪気に公正に保つべし。  
口に出だすこともまた然るべし。
- 正義** 他人の利益を傷つけ、あるいは与うべきを与えずして人に損害を及ぼすべからず。
- 中庸** 極端を避くべし。たとえ不法を受け、憤りに値すと思うとも、激怒を慎むべし。
- 清潔** 身体、衣服、住居に不潔を黙認すべからず。
- 平静** 小事、日常茶飯事、または避けがたき出来事に平静を失うなかれ。
- 純潔** 性交はもっぱら健康ないし子孫のためののみ行い、これにふけりて頭脳を鈍らせ、  
身体を弱め、または自他の平安ないし信用を傷つけるがごときことあるべからず。
- 謙譲** ソクラテスに見習うべし。

ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) は、アメリカ合衆国の政治家、外交官、著述家、物理学者、気象学者です。印刷業で成功を収めた後、政界に進出しアメリカ独立に多大な貢献をしました。また、凧を用いた実験で、雷が electricity (電気) であることを明らかにしたことで知られています。勤勉性、探究心の強さ、合理主義、社会活動への参加という 18 世紀における近代的人間像を象徴する人物といえます。己を含めて権力の集中を嫌った人間性は、個人崇拜を敬遠するアメリカの国民性を超え、アメリカの父として讃えられています。

『自伝』によると、1728 年ごろに彼は「道徳的完全に到達する大胆で難儀な計画」を思いつきました。この理想を実行するため、自らの信念を十三の徳目にまとめたのです。彼は毎週、一週間を徳目の一つに捧げて、年に 4 回この過程を繰り返したそうです。